聴覚障害児の社会性発達

○増田 早哉子^{1,2}

(¹慶應義塾大学経済学部・²日本学術振興会)

キーワード：聴覚障害・認知発達・社会性発達

Social development in children with hearing impairment.

Sayako MASUDA^{1,2}

(¹Graduate School of Economics, Keio University, ²JPSF)

Key Words: Hearing impairment, Cognitive development, Social development

目 的

聴覚障害は、単に「きこえ」の障害による直接的な音声コミュニケーション障害をひきおこすだけではない。とくに乳幼児期の言語獲得前に失聴した場合は、潜在的には正常であるはずの機能が聴覚障害のために発達せず、言語産出や概念獲得などの発達障害を引き起こす可能性がある。

さらに言語発達や概念形成の遅延は、結果として、他者の意図や感情の理解など、対人コミュニケーションにおいて重要な役割をもつ社会性の発達遅延を示す可能性が示唆されている (Peterson & Siegal, 1995; Peterson et al., 2005; 増田ら、準備中 など)。

他者の（世界・環境に関する）知識と自分の知識が正しく分離できているかを調べる課題に「誤信念課題」がある (Wimmer and Perner, 1983)。他者の意図の理解は、他の社会行動と同様に発達に伴って獲得され、健聴の健常児では通常4、5歳で正しく他者の意図を理解できるようになる。一方、社会的相互交渉およびコミュニケーション機能の質的な障害が指摘される自閉症児においては、同課題の遂行に障害があることが示され、他の論理課題は対照群（知能マッチした健聴児およびダウン症児）と同等の成績だが、誤信念課題においてのみ遂行が劣ることが報告されている (Baron-Cohen, et al., 1985)。

さらに近年、欧米や日本において、誤信念課題遂行の発達遅延が自閉症児特有でなく、聴覚障害児においても認められることが報告されている (Peterson, 2004, Masuda, 2016 など)。誤信念課題遂行と言語発達との関係は、いくつかの研究によって指摘されており (Cutting & Dunn, 1999 など)、聴覚障害児は言語発達や言語活用に障害があるために、同課題の発達遅延がみられると考えられている。

しかしその一方、聴覚障害児の課題遂行の遅延を解消するには、具体的にどのような言語活用の訓練が必要であるかは、未だ明確に示されていない。

そこで本研究では、対象との関りや被験児自身の参加の程度、仮定の大きさなどでより高次の誤信念課題であるとされる「サリー・アン課題」と、より低次の誤信念課題であるとされる「スマーティ課題」誤信念課題における聴覚障害児と健聴定型発達児の課題遂行行動を比較することで、聴覚障害児の誤信念課題遂行における問題点を明確にしたい。

方 法

誤信念課題として「サリー・アン課題」「スマーティ課題」を用い、聴覚障害児 27 名 (平均月齢 79.8 (±21)) および健聴定型発達児 22 名 (平均月齢 79.1 (±24)) を対象として、誤信念課題遂行を観察した。聴覚障害児の聴力は軽中度から高度であり、補聴器または人工内耳を使用していた。

実験では音声言語を使用した。被験児が難聴児の場合は他に手話・指文字を補助とした。被験児の保護者および、難聴

児の場合は加えて言語聴覚士が補助として帯同していた。

各課題において、ターゲット質問と論理質問があり、課題の内容を理解しているかどうかを論理質問で確認した。

結 果

その結果、聴覚障害児は高次・低次の誤信念課題ともに、健聴定型発達児と比較して、論理課題においては同等の成績を示す一方、他者意図推論課題の発達遅延がより多く観察された。聴覚障害児と健聴定型発達児の課題遂行閾値を、シグモイド関数を用いて求めた結果、聴覚障害児は健聴定型発達児と比較して、24 か月の遅延がみられることが明らかになった (聴覚障害児: 83 か月、健聴定型発達児: 58 か月)。

健聴定型発達児における高次・低次両課題の遂行可能年齢についてみると、低次課題は4歳で、高次課題は5歳で課題遂行が可能であった。両課題の遂行について比較すると、高次課題の遂行が可能な被験児は、低次課題の遂行が可能であった (表 1)。

一方、聴覚障害児の課題遂行年齢についてみると、言語獲得や聴力によって個人差が大きかったが、高次の課題遂行が可能であったにもかかわらず、低次の課題の遂行が困難であった被験児がみられた。(表 1)

表 1 高次・低次課題における遂行人数 (人)

低次課題	高次課題	健聴児	難聴児
通過	通過	11	10
通過	失敗	2	1
失敗	通過	0	4
失敗	失敗	2	20

考 察

結果から、聴覚障害児は健聴定型発達児とは異なる方略で誤信念課題を遂行している可能性が示された。

課題の性質上、高次の課題は今あるものを参照し、また過去に生じた事柄の確認であるが、低次の課題は展望的なことを尋ねられ、「今ここにいない」人についてきかれている。難聴児においては、自分が体験していない並行生起事象を参照する課題の遂行が困難になっていると推察され、療育の方向性が示された。